

長崎県南部地域総合開発地域

土地分類基本調査

口之津・三角

5 万 分 の 1

国 土 調 査

長 崎 県

1 9 7 6

序 文

現代におけるわが国の高度経済成長と総合開発への指向は、経済社会構造にさまざまなひずみをもたらし、各種公害や乱開発等大きな社会問題を提起しております。

国土は国民のための限られた資源であり、その有効適切な利用を図ることが今後ますます要求されるものと思いますが、本県においてもその恵まれた環境を保全しつつ、地域の特性を生かした土地利用を理念として各種施策を進めているところであります。

本調査はこのような諸政策を進めるに必要な調査のうち最も基礎的な「地形」「表層地質」「土壌」を主体とする土地条件を科学的総合的に調査することを目的として、国土調査法に基づく都道府県土地分類基本調査として、国土庁の国土調査費補助金を得て実施するものであります。

昭和48年度は「肥前小浜」「長崎」「大村」、昭和49年度「佐世保」「佐世保南部」「平戸」「早岐（長崎県・佐賀県協同）」「唐津（佐賀県・長崎県協同）」、50年度「神浦」「野母崎」、51年度は「島原・荒尾」「口之津・三角」の県域地域の調査を実施し、ここにその成果をとりまとめました。

この調査の成果が広く関係各位に活用されるよう希望するものであります。

調査の実施にあたり、ご指導・ご助言を賜った国土庁土地局国土調査課の方々をはじめ、調査に直接たずさわった方々、資料収集等積極的にご協力いただいた市町村並びに関係機関の方々に対し心から謝意を表する次第であります。

昭和52年3月

長崎県理事
(土地対策担当) 小 田 浩 爾

まえがき

1. 本調査は、都道府県土地分類基本調査作業規程に基づき、長崎県土地対策室・農林部（総合農林試験場）・長崎大学教育学部の諸機関により実施したもので、調査の事業主体は長崎県である。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
3. 調査基図は、測量法第27条第2項の規定により建設大臣が刊行した5万分の1地形図を使用した。
4. 調査の実施・成果作成の関係機関及び関係担当者は次のとおりである。

指 導 国土庁土地局国土調査課

総 括 長崎県土地対策室 室 長 松 本 重 寿
土地利用現況調査 副主幹 築 瀬 昭

地形調査 長崎大学教育学部 技 師 橋 口 敏 雄
教授 石 井 泰 義

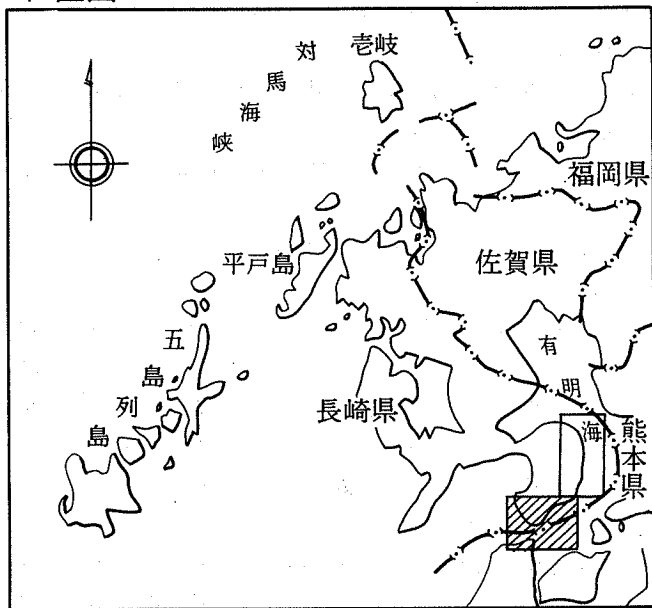
開発関連調査（傾斜区分、水系・谷密度）

表層地質調査 長崎大学教育学部 教 授 鎌 田 泰 彦
開発関連調査（防 災）

土壌調査 長崎県総合農林試験場 科 長 小 野 末 太
技 師 松 尾 俊 彦

協力機関 長崎県関係各課及び関係
地方機関並びに関係市町村

位置図



目 次

序 文

まえがき

総 論

I 位置および行政区画	1
1. 位 置	
2. 行政区画	
II 地域の特性	2
1. 自然条件	
2. 社会経済条件	
III 主要産業の概要	7
IV 開発の現状と方向	8

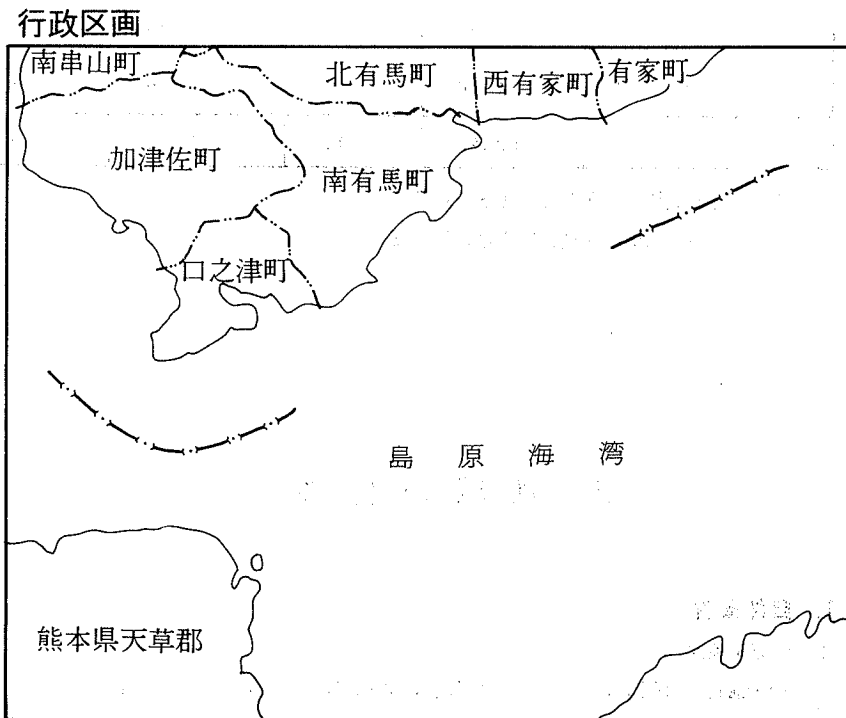
各 論

I 地形分類図	11
II 表層地質図	18
III 土 壌 図	24
IV 傾斜区分図	28
V 水系・谷密度図	29
VI 防 災 図	31
VII 土地利用現況図	33

總論

I 位置および行政区画

1. 位置：「口之津・三角」図葉は長崎県の東南部に位置し，東経 $130^{\circ}7'30'' \sim 130^{\circ}22'30''$ ，北緯 $32^{\circ}40' \sim 30^{\circ}0'$ の範囲内にあり，図葉内陸地面積は 83Km^2 である。
2. 行政区画：本図葉の行政区画は南高来郡南串山町，加津佐町，口之津町，南有馬町，北有馬町，西有家町及び有家町の7カ町からなっている。



第1表 図葉内の市町村別面積

区分 市町村名	図葉内面積		市町村面積	A/B (%)
	実数A (Km ²)	構成(%)	B (Km ²)	
南高来郡南串山町	5.00	6	15.22	33
加津佐町	24.38	29	24.38	100
口之津町	9.98	12	9.98	100
南有馬町	23.21	29	23.21	100
北有馬町	10.06	12	26.59	38
西有家町	6.20	7	29.08	21
有家町	4.40	5	23.66	19
計	83.23	100	152.12	55

資料：建設省国土地理院調べ（S. 50年）

但し、図葉内面積は県土地対策室調べ

II 地域の特性

1. 自然条件

(ア) 気象条件

この地域は、九州型気候区のうち西海型気候区に属し、冬暖かく夏は比較的涼しいといった典型的海洋性の気候に恵まれている。

第2表 月間平均最高気温

1℃

月 観測所	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
口之津	10.2	14.8	15.6	20.5	22.3	25.9	29.3	×	×	×	×	×	×

注) ×印は適正資料なし

第3表 月間平均最低気温

1℃

月 観測所	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
口之津	1.4	5.0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

第4表 月間降水量

1mm

月 観測所	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総量
口之津	35	243	×	×	267	×	295	×	×	×	×	×	×

資料：長崎県気象月報（長崎海洋気象台）S. 51年1月～12月

第5表 観測所の位置

観測所名	所在地	東経	北緯	海拔	摘要
口之津	南高来郡口之津町	32°36'4	130°11'7	0	図葉中央

(イ) 土地利用の現況

関係市町村の平均耕地率は約36%とかなり高く、雲仙山麓の緩傾斜な地形が農業に適しているためである。緩傾斜台地は畑地に利用され、みかん、ばれいしょ、酪農、露地野菜が盛んであり海浜の沖積地には田が開かれている。また傾斜地にも棚田が散在する。

第6表 土地利用の現況

(単位: ha・%)

市町村	総土地面積(A)	耕地面積				耕地率 (B)/(A)	森林面積 (C)	森林率 (C)/(A)
		田	畑	樹園地	計			
南高来郡南串山町	1,522	99	475	35	610	40	457	30
加津佐町	2,438	300	363	217	880	36	649	26
口之津町	998	102	159	72	333	33	179	17
南有馬町	2,321	396	191	238	825	36	694	30
北有馬町	2,659	382	170	368	920	35	1,231	46
西有家町	2,908	378	142	387	907	31	1,340	46
有家町	2,366	295	368	402	1,064	45	664	28
計	15,212	1,952	1,868	1,719	5,539	36	5,214	34
比率	100	13	12	11	36		34	

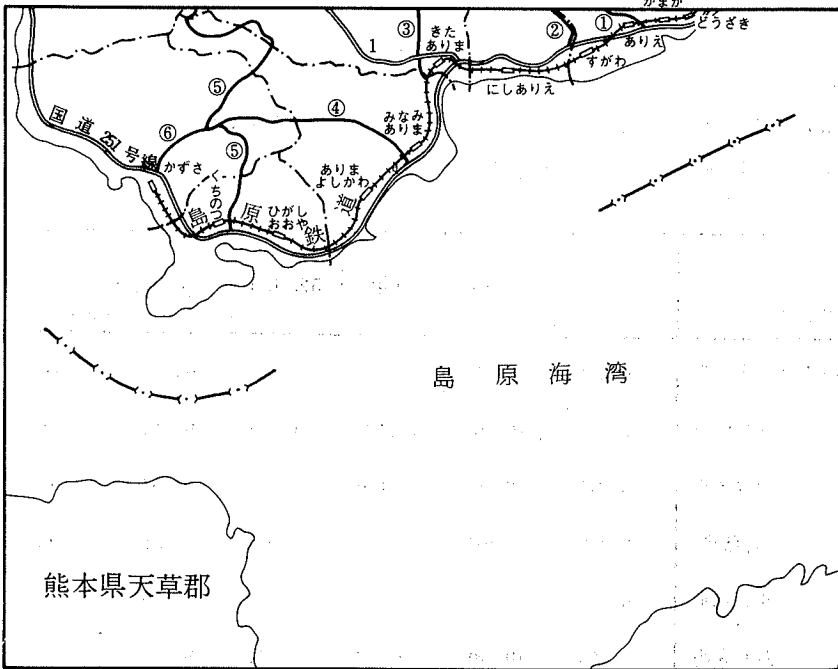
資料:長崎県統計年間(S.51),長崎県の林業統計(S.51年)

2. 社会経済条件

(ア) 交通

この地域は島原半島を一周する国道251号線、諫早-加津佐間の島原鉄道のほかに主要地方道、一般県道が整備されてきてはいるが島原北部に比べまだまだ遅れているのが現状である。

道路鉄道位置図



1. 道路

	路線名	起点	終点
国 道	251号	長崎市	諫早市

主要地方道	1 小浜北有馬線	小浜町	北有馬町
一般県道	①雲仙有家線	雲仙	有家町
	②雲仙西有家線	雲仙	西有家町
	③矢次南有馬線	北有馬町	南有馬町
	④山口南有馬線	加津佐町	南有馬町
	⑤口之津雲仙線	口之津町	雲仙
	⑥加津佐停車場山口線	加津佐町	加津佐町

2. 鉄 道

路線名	起 点	終 点
島原鉄道線	諫早市	加津佐町

(1) 人 口

図葉内関係市町村の人口は第7表のとおりで全体的に年々若干の減少を見ている。人口密度では加津佐町が県下でも4番の高い密度を有する。

第7表 関係市町村の人口推移

年次 市町村名	40年	45年	50年	52.1.1	52/40(%)	人口密度 52.1.1 (Km ² 当り)
	南高来郡南串山町	6,511	5,919	5,927	5,866	90.09
加津佐町	10,765	10,462	10,425	10,456	97.13	428
口之津町	9,245	10,054	9,136	9,057	97.97	907
南有馬町	9,308	8,620	8,414	8,425	90.51	362
北有馬町	6,579	6,056	5,783	5,736	87.19	215
西有家町	11,465	10,688	10,023	10,042	87.59	345
有家町	11,682	10,795	10,361	10,294	88.12	435
計	65,555	62,594	60,069	59,876	91.34	394

資料：長崎県統計年鑑（S. 51年），ながさきの統計（S. 52年3月）

Ⅲ 主要産業の概要

図葉内関係市町村の就業人口は第8表のとおりで、全体的に第1次産業の占める割合が高くなっている。

第8表 産業別就業人口の構成

産業別 市町村名	総数	第 一 次 産 業				第 二 次 産 業				第三次 産 業
		計	農 業	林 業 狩猟業	漁 業	計	鉱 業	建設業	製造業	
南高来郡 南串山町	2,842	1,701	1,568	—	133	390	1	162	227	751
加津佐町	4,242	1,629	1,539	—	90	327	—	168	159	2,286
口之津町	3,417	752	651	1	100	281	—	124	157	2,384
南有馬町	3,654	1,803	1,693	2	108	333	—	171	162	1,518
北有馬町	2,629	1,731	1,711	12	8	230	—	134	96	668
西有家町	4,392	2,064	1,797	3	264	989	—	322	667	1,339
有家町	4,975	2,472	2,208	1	263	927	—	311	616	1,576
計	26,151	12,152	11,167	19	966	3,477	1	1,392	2,084	10,522
比 率	100	46.5	42.7	0.1	3.7	13.3	0	5.3	8.0	40.2
県全体に 占める割合	3.86	8.0	10.0	1.7	2.5	2.1	0	2.4	2.0	2.9

資料：国勢調査報告（S. 50年）

第9表 主要産業の状況

単位：百万円

産業別 市町村名	農 業			漁 業		製 造 業			商 業	
	農家数	うち専業	農業粗生産額	経営体数	総漁獲高	事業所	従業員	製造品出荷額等	商店数	年間販売額
南高来郡 南串山町	809	291	1,774	128	1,174	42	334	42	81	68
加津佐町	870	346	1,856	120	232	12	56	4	177	306
口之津町	677	162	875	109	223	20	236	63	193	267
南有馬町	964	357	1,883	90	285	15	196	44	136	110
北有馬町	912	323	1,900	—	—	7	38	7	95	97
西有家町	1,157	212	1,903	138	1,305	153	902	321	165	140
有家町	1,301	239	2,823	139	631	94	525	102	209	254
計	6,690	1,930	13,014	724	3,850	343	2,287	583	1,056	1,242
県全体に占める割合	8.0	13.8	9.7	3.1	0.5	6.6	2.4	0.8	3.9	1.1

資料：長崎県統計年鑑（S. 51年），長崎農林水産統計年報（S. 50年～51年）

IV 開発の現状と方向

この地域においては、かつて企業導入の計画もあったが造船不況のため計画中止となり

大企業はほとんど存していない。この地域は農業が主であり、開発計画においても農業以外には考えられない。そのためには南部地域総合開発計画の実施いかんにかかっている。

各 論

I . 地 形 分 類 図

1 . 地 形 の 概 要

本図の西北部には、彦山(380.2m)が、周縁に高位の溶岩台地を伴って、中・小起伏量を示す彦山火山地を形成し、その山麓地の末端部は第三紀層に移行し、花房・檜山・伊場には地すべりが発生している。堀川以南の鳳上岳(409.7m)・愛宕山(291.4m)は、溶岩台地で、共に周辺に第三紀層の山麓地を有する起伏量200~300mの中起伏山地で、山麓地は地すべり多発地帯である。両山地の間にある富士山及び愛宕山西方の海岸にある岩戸山・女島の孤峯は起伏量90m内外の火山性丘陵地をなす。南端の早崎は起伏量80m内外を示す溶岩台地で、周辺に低位段丘を伴い、砂嘴によって愛宕山山地に繋がれた陸繋島である。なお、本図の西海岸および堀川両岸には低位の段丘がみられる。東海岸の原城趾及び法花寺付近は阿蘇溶結凝灰岩から成る低位段丘である。

本図の東北部では、坂下川と有家川との間に論所原小起伏山地の末端部がみられる。その末端部は浸食によって10個内外の谷に分岐し、いずれも台地状の山麓地を伴っている。有馬川の両岸および西有家海岸や東端の石田海岸には低位の砂礫段丘がある。

低地は西岸では小松川、堀川の河谷、南岸では白浜・口之津低地、東岸では有家扇状地・有馬川河口低地、大江・下苅・向小屋の低地があげられ、堀川・有馬川河口には干拓地があり、口之津干拓地の前面には人工造成地がある。

上に述べた地形の性状を細説するため次の地形区を設定した。

I . 山 地 ・ 山 麓

- I a 彦山火山地
- I a-1 彦山中起伏火山地
- I a-2 彦山小起伏火山地
- I a-3 京泊・栄原高位溶岩台地
- I a-4 辺木・山内中位溶岩台地
- I a' 彦山山麓地

- I b 鳳上岳山地
- I b 鳳上岳・上原高位溶岩台地

- I b' - 1 同上北部山麓地
- I b' - 2 同上東北部山麓地
- I b' - 3 同上東南部山麓地
- I b' - 4 同上西南部山麓地
- I b' - 5 同上西部山麓地

- I c 愛宕山山地
- I c' 同上山麓地

- I d 論所原小起伏火山地
- I d' 同上山麓地
- I d' - 1 北有馬山麓地
- I d' - 2 西有家山麓地

II. 丘陵地

- II a 富士山丘陵地
- II b 岩戸山丘陵地
- II c 女島丘陵地
- II d 早崎丘陵地

III. 台地・段丘

- III a 西岸台地
- III a - 1 竹比岩石段丘
- III a - 2 津波見岩石段丘
- III a - 3 串砂礫段丘
- III a - 4 上里砂礫段丘
- III b 堀川流域段丘
- III b - 1 山口・伊場砂礫段丘
- III b - 2 道原砂礫段丘
- III b - 3 蓮岳砂礫段丘

- III b - 4 水月砂礫段丘
- III c 口之津段丘
- III c - 1 久木山砂礫段丘
- III c - 2 三軒屋砂礫段丘
- III d 早崎段丘
- III d - 1 早崎岩石段丘
- III d - 2 南大迫岩石段丘
- III e 南有馬段丘
- III e - 1 原城趾岩石段丘
- III e - 2 法花寺岩石段丘
- III f 有馬川流域段丘
- III g 西有家海岸段丘
- III h 石田海岸段丘

IV. 低 地

- IV a 西岸低地
- IV a - 1 小松川谷底平野
- IV a - 2 堀川谷底平野
- IV b 南岸低地
- IV b - 1 唐人町低地
- IV b - 2 白浜低地
- IV b - 3 野向低地
- IV c 東岸低地
- IV c - 1 有家低地（扇状地）
- IV c - 2 西有家谷底平野
- IV c - 3 有馬川河口低地
- IV c - 4 大江低地
- IV c - 5 下湾・向小屋低地

2. 地形細説

2-1 山地・山麓地])

2-1-1 彦山火山地 (I a)

彦山火山地は頂上部 (I a - 1) で、局地的に 200 m 程度の起伏量を示し、周辺に小起伏火山地 (I a - 2) を伴う。小起伏火山地には内平集落がある。I a - 2 の周辺は巾 2 km 内外の平坦な溶岩台地 (I a - 3) が広がり、標高 200 ~ 250 m の高位面をなし、その西方は標高 120 m 内外の中位溶岩台地 (I a - 4) に移行し、その末端は急崖をなして海に迫っている。彦山火山地の山麓地は、起伏量 100 m 内外の第三紀層より成るが、地形的には、彦山火山地の山麓に当るので、ここでは便宜的に火山山麓地 (I a') として取扱うことにした。この地形面は、平均勾配 30° 内外の急傾斜で I a - 4 に接し、地形面の平均勾配は 15° 内外の山麓地で、花房・檜山・伊場では、深度 10 m 以内に滑り面を有する浅層地すべりが、現に活動中である。

2-1-2 鳳上岳山地

鳳上岳 (409 m) からその南の上原付近にかけては、標高 300 ~ 400 m の高位溶岩台地 (I b) で、鳳上岳は浸食 (地すべり) によって、その平坦面が縮小されビュート状をなし、上原はメーサ状を呈している。周辺の急崖は地すべりによる滑落崖である。周辺の山麓地 (I b') は、第三紀層から成り、起伏量は 100 m 内外を示している。北部山麓地 (I b' - 1) には、大河内を中心とする二列の北向きの弧状を呈す急崖があり、古い時代の地すべりが推定され、大河内は、地すべり鞍部の平坦地上の集落であるが、現在この地形面には、地すべりは活動していない。(I b') のうちでは最も急傾斜地が多い。東北部山麓地 (I b' - 2) も、古くから、地すべりが瀕発した地帯で、鳳上岳・上原地縁辺の北部向きの弧状急崖のほか、この地形面上にも弧状急崖がみられ、また白木野の平坦地や中腹の平坦地は古い地すべりによって生じたものと思われる。起伏量 50 m 以下の山麓地を伴い、(I b') のうちでは最も緩傾斜地 (8° 以下) に富む。現在、河原に北東方面の地すべりが発生している。東南部山麓地 (I b' - 3) は、(I b' - 1) と (I b' - 2) の中間的地形面を呈し、頭部に地すべり平坦地を有し、井手清水・平・矢竹・上揚・堤に地すべりが発生している。西南部 (I b' - 4) と西部 (I b' - 5) には、頭部の地すべり鞍部に起因する平坦地が狭少になっている。(I b' - 4) は (I b' - 3) と同型の傾斜面を呈し現に、地すべりの多発地帯をなす。上夏吉・下夏吉・上大抜・下大抜・広畑・小利がそれである。(I b' - 5) は (I b') のうちでは (I b' - 2) に次いで、8° 以下の緩傾斜

地に富み、上登竜・山口には、地すべりが発生している。

2-1-3 愛宕山山地 (Ic)

愛宕山(291.4m)は、山頂平坦面を有するメーサ状の高位溶岩台地(Ic)で、山麓地(Ic')との境界付近の横平・八久保に地すべりが発生している。

2-1-4 論所原小起伏火山地

「肥前小浜」「三角」、両図幅にみられる標高45.0m付近の論所原を扇頂とする火山性扇状地は、起伏量200mを示すため、ここでは小起伏山地として取扱った。本図では東北部に、その末端が(Ib)として示される。山麓地(I d')は、坂下川・龍石川間において台地状に移行した北有馬山麓地(I d' - 1)と龍石川、有家川間において、水分(島原図幅)を扇頂とする扇状地状の西有家山麓地(I d' - 2)とに二分される。

3-1 丘陵地(II)

富士山丘陵地(IIa)は、鳳上岳山地(Ib)と愛宕山山地(Ic)との間に介在する。起伏量100m以下の小突起(160m)で、周辺に地すべりが発生している。愛宕山山地の西海岸に砂嘴で繋がれて陸繋島をなす岩戸山(96m)・女島(70m)は急崖を有する弧峯で、それぞれ(IIb)、(IIc)の丘陵地である。この図の南端にある早崎丘陵地(II d)も、陸繋島で、起伏量80m内外を示す溶岩から構成された丘陵地で、北側に断層起源の二列の急崖を有する。

4-1 台地・段丘(III)

台地・段丘に属するもののうち、標高200m以上の京泊・路木高位溶岩台地(Ia-3)・鳳上岳・上原高位溶岩台地(Ib)・愛宕山高位溶岩台地・辺木山内中位溶岩台地(Ia-4)は、それぞれ(Ia)、(Ib)、(Ic)の山地に含め、また標高200m以上を示す溶岩台地の急崖下に地すべりによって生じた高位の砂礫段丘は、山麓地(Ib')に含めて解説した。従ってここでは標高50m以下の段丘について述べる。

4-1-1 西岸台地(IIIa)

竹比(IIIa-1)、津波見(IIIa-2)は、軟弱な角礫岩から成る標高100m以下の低位海岸段丘で、段丘崖は豪雨によってしばしば崩壊している。串段丘(IIIa-3)は、標高50m以下の砂礫段丘で、串では20m内外の段丘面を示すが、小松では、北方急崖の崩積土におおわれて、段丘面は消失している。小松川左岸の上里段丘(IIIa-4)は、

2段の段丘面を有し、標高20m内外の砂礫段丘の背後に、標高40～50mの砂礫段丘を伴っている。

4-1-2 堀川流域段丘(Ⅲb)

山口・伊場段丘(Ⅲb-1)および道原段丘(Ⅲb-2)は、共に標高20m内外の低位砂礫段丘で、彦山・鳳上岳の山麓地(Ⅰa・Ⅰb'-5)の末端部に発生した二次的地すべりに起因する河岸段丘である。堀川左岸の蓮岳段丘(Ⅲb-3)および水月段丘(Ⅲb-4)は、共に標高50m内外のもので、愛宕山の一次的地すべりに起因する砂礫段丘である。

4-1-3 口之津段丘(Ⅲc)

久木山段丘(Ⅲc-1)は、愛宕山地すべりの末端に相当する砂礫段丘で、背後には地すべり鞍部に相当する八久保平地(高位砂礫段丘)がみられる。三軒屋段丘(Ⅲc-2)は愛宕山山麓地(Ⅰc')の二次的地すべりによる地すべり末端の段丘化したものである。

4-1-4 早崎段丘(Ⅲd)

野向・浜には標高20m内外の平地地が、溶岩からなる岩石段丘(Ⅲd-1)を形成し、南大迫にも同型の海岸段丘(Ⅲd-2)が存在する。

4-1-5 南有馬段丘(Ⅲe)

南有馬町の原城趾は、阿蘇溶結凝灰岩から成る標高20～30mの海岸段丘(Ⅲe-1)で、法花寺付近にも全く同型の低位段丘(Ⅲe-2)がある。

4-1-6 有馬川流域段丘(Ⅲf)

有馬川右岩には、上流から標高40m、下流では標高10mの河岸段丘が、清谷下清水・大峰・小路に分布し、左岸には、これに対比される折木・奥野・西正寺・鳥淵・谷川の各段丘が配列している。支流の坂下川・西正寺川・高江川・大手川の沿岸にも小規模な低位の砂礫段丘が指摘される。

4-1-7 西有家海岸段丘(Ⅲg)

論所原小起伏山地(Ⅰd)は、火山性扇状地の形態をなして次第に南方に低夷し、末端部では平坦な段丘地形に移行して島原湾に臨んでいる。本立石・上西ノ浦・引無田・法思寺の標高20m内外の竜石層の岩石段丘(Ⅲg)がそれである。

4-1-8 石田海岸段丘(Ⅲh)

湯河内(島原図幅)を扇頂とする火山性扇状地の末端が平坦地に移行し、標高20m内外の石田海岸段丘(Ⅲh)を形成している。

尾首・前田・楡山・境目の砂礫段丘がこれに該当する。

5-1 低地(Ⅳ)

5-1-1 西岸低地(Ⅳa)(干拓地・海岸砂丘を含む)

小松川は彦山に源を発し、西越崎の遷急点以下に谷底平野(Ⅳa-1)をつくり、河口部は野田浜砂丘を横切っている。鳳上岳および栄原溶岩台地に源を発する堀川は、中流部に狭小な谷底平野(Ⅳa-2)をつくり、下流部は野田浜砂丘と前浜砂丘の後背低湿地を旧播時代に干拓した低地(Ⅳa-2)となっている。加津佐の町屋は前浜砂丘上に立地している。

5-1-2 南岸低地(Ⅳb)(干拓地・海岸砂丘人工造成地を含む)

愛宕山南麓の低地は砂丘によって唐人町低地(Ⅳb-1)と白浜低地(Ⅳb-2)に二分されるが、前者は、永禄10年(1567年)唐人町に開港したと伝えられ、その後干拓された低地があり、その前面に港湾施設を有する人工造成地がある。後者は白浜砂丘と東方砂丘間の低地で、東方砂丘は東に急崖を有する隆起砂丘である。早崎には野間と浜の溶岩流の間に形成された窪地の狭小な低地(Ⅳb-3)がある。

5-1-3 東岸低地(Ⅳc)(干拓地・海岸砂丘を含む)

図の東北部に有家川扇状地が、傾斜3°以下の低地(Ⅳc-1)を形成、扇状地性の西有家山麓地(Ⅳd'-2)を放射状に刻む谷に西有家谷底平野(Ⅳc-2)がある。有馬川は上・中流部で鋭入蛇行し、両岸には河岸段丘が発達し、谷底平野に乏しいが、下流に小デルタ(Ⅳc-3)を形成、海岸部には、原城趾から北方にのびる砂丘があり、砂丘の前面には、昭和22~昭和40に造成された干拓地(Ⅳc-3)が広がっている。原城趾の南北両端から北方及び南方に発達する両砂丘間に砂原低を含む大江低地(Ⅳc-4)があり、下瀉から向小屋間の海岸砂丘の背後に下瀉・向小屋低地(Ⅳc-5)がある。

Ⅱ．表層地質図

本図幅は、島原半島の南端地域に当り、雲仙火山岩類の基盤岩をなす口之津層群や、輝石安山岩質と玄武岩質の火山岩類などが分布する。口之津層群は古第三系の坂瀬川頁岩層の上に不整合的に重なる地層で、全層厚は800mに及ぶ。口之津層群は更に、河川〜デルタ性の堆積相を示す下部の大屋層と、浅海堆積相の北有馬層に分けられ、それぞれ異なった岩質の特徴をもっている。

「口之津」図幅の北西部では大屋層を被覆する南串山凝灰角礫岩があり、その上に南島原安山岩が重なり、溶岩台地を形成している。また新旧2回にわたって流出したと考えられる玄武岩があり、旧期のものが口之津町早崎半島や西大屋付近に、新期のものは、加津佐町愛宕山や南有馬町上原・鳳上岳などに分布する。

「三角」図幅内の北有馬・西有家町では、口之津層群北有馬層の上を雲仙基底火山砕屑岩の末端部が覆っている。また南有馬町の原城跡の台地上には軽石質の阿蘇火山灰層が分布する。この台地の南端の大江海岸には新期更新世の海成層である大江貝層が露出し、貝化石を産出する。

1．未固結堆積物

1-1 砂（海浜砂・砂丘砂）s

加津佐町の岩戸山に続く野田浜、女島より南北に延びる浜、口之津町白浜はいずれも砂浜であり、背後に砂丘をともなう。有明海側の南有馬・西有家町海岸では、干潮時に砂質の干潟が広く現われる。

1-2 礫・砂・泥（沖積低地堆積層）g s m

堀川・小松川・有馬川などの流域には河川堆積物により堆積された沖積低地が発達する。有馬川の河口部には三角洲が形成され、一部は干拓地（c）となる。口之津港付近には海成粘土層を含む沖積層が発達する。

2．半固結堆積物

2-1 巨礫（玉石）、粘土（玄武岩質崩積土層）b c l

南有馬町白木野付近には玄武岩起原の厚い崩積土が分布し、茶褐色粘土中に多量の未風

化の玄武岩の転石を含む。上原や愛宕山の玄武岩台地周辺の地すべり地帯にも同様の崩積土があって、玄武岩の転石が散在するが、地層としての連続性に乏しい。

2-2 巨礫(玉石)、砂(扇状地堆積層) f

有家川下流域の新时期扇状地を構成する安山岩の巨礫を含む砂礫層であるが、堆積面の土地利用が進んでいるため露頭に乏しい。

2-3 礫・砂・粘土(段丘堆積層) t

加津佐町の沖積低地の周縁には、安山岩の転石を含む分級不良な砂質の粘土層よりなる低位段丘層が発達する。原城跡南部の海岸に露出する大江貝層は、口之津層の泥岩と軽石質凝灰岩(灰石)を刻んだ谷を埋めた地層で、最上部の堆積面はほぼ低位段丘面に対比される。大江層は8mの層厚をもち、中部の貝層から産出したアカニシの¹⁴C年代は19,400±700年B.P.であり、下部層の炭化木片は25,900±1,000年B.P.と測定されている。

3. 固結堆積物

3-1 砂岩・泥岩(北有馬層) K a

細～中粒砂岩、砂質シルト岩などを主とする細粒堆積物よりなるが、北有馬町田平北部では小礫を含む砂岩層を挟み、貝化石を多産する。有馬川より北部に広く分布し、西部では南上山凝灰角礫岩に、また東部では雲仙基底火山碎屑岩に被覆される。

3-2 礫岩・砂岩・泥岩(大屋層) O y

口之津層群の主体をなす大屋層は全般的に固結度の低い砂礫と泥岩の互層よりなり、岩相の側方変化が著しい。鍵層となる3～5mの厚さの黒灰色の軽石質凝灰岩(灰石)を境として上部層と下部層に2分され、砂礫は上部層で優勢となる。礫岩はよく円磨された堅硬な礫よりなり粗粒砂の充填物をもち、礫の岩種にはチャート、珪岩、アプライト、火山岩などである。礫を含まない硬質の中粒砂岩には雲母片を多量に含むことが多い。泥岩は殆んど塊状で、新鮮なものはある程度凝固し、ボーリング調査の際のコアへの採取率も良好である。

加津佐町津波見海岸に干潮時に露出する大屋層最上部より、鹿類を主とする脊椎動物化石や松柏類の毬果や材などの植物遺体を多産する。

3-3 頁岩・砂岩互層(坂瀬川層) S a

口之津層群の基盤岩は、南有馬町向小屋と加津佐町山口において、きわめて小範囲に露

出する古第三紀層であり、天草下島に広く分布する坂瀬川層に対比されている。岩質は主として黒灰色泥岩～砂質泥岩と細粒砂岩との互層である。

4. 火山性岩石

4-1 軽石質火山灰（阿蘇火山灰）A s

南有馬町原城跡の台地上や、国道（251号）をはさんだ対岸の台地上には黒灰色の火山灰が分布する。風化した部分はオレンジ色の粘土となる。有馬商業高校構内の崖には新鮮な火山灰と、風化粘土との移り変りが認められる。本層は有明海周辺に発達する八女粘土層の一部をなすもので、新期阿蘇火山砕流（約3万年前）の末端相を示す火山灰と考えられる。

4-2 火山礫・砂（雲仙基底火山砕屑岩）U p

隣接する「島原」図幅に広く分布するもので、雲仙火山体の基底部をつくる成層した火山砕屑岩であり、竜石層とも呼ばれる。模式地の西有家町竜石と須川温泉との間の海岸では、口之津層群を不整合に覆う本層の基底部が見られる。岩質は雲仙火山岩型の斑晶の大きい黒雲母角閃石安山岩の岩塊や、その砕屑物によって特徴づけられる。

4-3 複輝石安山岩（南島原安山岩）A n p

南串山町と加津佐町との境をなす台地は灰色の複輝石安山岩で構成され、彦山（380m）を最高点とする溶岩台地を形成している。岩質は比較的緻密な複輝石安山岩であり、産状は溶岩流をなし、夾雑物をはさまない。同類の安山岩は、隣接する「肥前小浜」図幅の森山安山岩、「長崎」図幅の小江原安山岩、「大村」図幅の大村安山岩であり、九州北・中部に分布する豊肥火山活動によって流出した豊肥溶岩（筑紫溶岩）の一員をなす。

4-4 安山岩質凝灰角礫岩、凝灰岩（南串山凝灰角礫岩）T b 1

南島原安山岩の下に横たわる火山砕屑岩であり、口之津層群の上に重なる。角礫をなす岩片は殆んど輝石安山岩であり、所により“クサレ礫”となる。加津佐町野田名の小松川上流（西越崎付近）の本岩下部は美事な成層状態を示す層灰岩（凝灰岩と砂質凝灰岩の互層）が発達する。

4-5 円礫混り凝灰角礫岩（岩戸山凝灰角礫岩）T b 2

加津佐町岩戸山は堅硬な古期岩類の円礫を含む安山岩質の凝灰角礫岩により構成される。同類の火山砕屑岩は女島、矢岳、富士山、鳳上岳を構成し、いずれも浸食に取り残された急峻な地形を示す。本岩は鳳上岳では口之津層群の上に重なり、玄武岩に被覆されている。

4-6 角閃石安山岩（菫蒲田安山岩）A n h

南有馬町南部の菫蒲田と向小屋に分布する堅硬な安山岩であり、岩脈をなしているものと考えられる。

4-7 玄武岩（早崎・上原玄武岩）B a

本図幅内に分布する玄武岩を大別すると、口之津町の早崎半島の低い溶岩台地をつくる早崎玄武岩と、南有馬町上原や加津佐町愛宕山を構成する高所の溶岩台地をつくる上原玄武岩とがある。早崎玄武岩にあつては基底部に岩滓（スコリア）質凝灰岩をともなうが、上原玄武岩では直接口之津層群の上に溶岩流が重なっている。上原玄武岩は地表から基底まで27～56mの厚さをもつ溶岩流であり、下部の黒色玄武岩と上部の灰色玄武岩が識別される。白木野大池の石切場では著しい柱状節理が見られる。

4-7 岩滓・層灰岩S c

早崎玄武岩の基底部にはよく成層した岩滓（スコリア）質層灰岩や塊状の凝灰岩が発達する。とくに東大迫の土平崎や、南大迫の白間崎付近の海岸に好露出が見られる。

5. 応用地質

5-1 地質災害

口之津層群の大屋層分布地域は、規模は小さいが「北松地すべり」地帯にも匹敵する地すべりの多発地帯である。地すべり機構としては、砂礫層や玄武岩より供給される地下水により地層中の泥岩が粘土化することが第一に考えられるが、とくに地層の傾斜が斜面と同じ方向の流れ盤の際に顕著に地表が滑動する。また崩積土の下に泥岩層が横たわる場合も同様な地すべり現象を起す。

5-2 採石

南有馬町白木野大池に面した所で玄武岩が採石されたことがあるが、現在は止めている。愛宕山においても採石跡がある。上原玄武岩について次の測定値を得た。

層 準	名 称	比 重	吸水量
上 部	灰色玄武岩	2.79	1.44%
下 部	黒色玄武岩	2.87	0.96%

5-3 温 泉

須川温泉は西有家町引無田において、300mの深さのボーリングで開発されたもので、中性の重碳酸土類泉型の単純泉であり、孔口温度が30.6℃の微温泉である。

原城温泉は、南有馬町浦田海岸において古くから湧出していたものを、ボーリングにより開発し、泉源は3カ所あって自噴する。泉質は重曹泉～含土類重曹泉型の単純泉である。泉温は最も深い原城温泉センター泉源の深さ241mにおいて38.2℃と確認され、孔口温度は34.5℃である。

主 要 参 考 文 献

- 赤木 健（1935）：7万5千分の1「口之津」地質図幅 地質調査所
- 井上正昭（1953）：長崎県島原半島南部の古第三紀層について 福岡学芸大学紀要3, 21-30
- 村上 篁（1975）：島原半島水理地質図 地質調査所
- 太田一也（1973）：島原半島における温泉の地質学的研究 九州大学理学部島原火山温泉研究所研究報告 8, 1-33
- 大塚裕之（1966）：口ノ津層群の層序および堆積物-口ノ津層群の地史学的研究 その1-地質学雑誌 72, 8, 371-384
- 大塚裕之（1966）：口ノ津層群の地質構造・化石および対比-口ノ津層群の地史学的研究 その2-地質学雑誌 72, 10, 491-501
- 大塚裕之（1971）：津波見背椎動物化石群の産状および津波見植物遺体群集について 鹿児島大学理学部紀要（地学・生物学）4, 31-41
- 浦田英夫（1959）：長崎県島原半島南端の古第三系について 九州大学教養部地学研究報告 6, 21-28

地層および岩石一覽（口之津・三角図幅）

地質時代		地質系統		表層地質分類			
新 生 代	第 四 紀	完新世 (沖積世)	埋立地, 干拓地		C	土石	未固結 堆積物
			海浜砂, 砂丘砂		S	砂	
			沖積低地堆積層		g sm	礫, 砂, 泥	
	第 四 紀	更新世 (洪積世)	玄武岩質崩積土層		b c l	巨礫(玉石), 粘土	半固結 堆積物
			扇状地堆積層		f	巨礫(玉石), 砂	
			段丘堆積層		t	礫, 砂, 粘土	
			阿蘇火山灰		As	軽石質火山灰	火 山 性 岩 石
			雲仙基底火山砕屑岩		Up	火山礫, 砂	
			南島原安山岩		An p	複輝輝石安山岩	
			南串山凝灰角礫岩		T b 7	安山岩質凝灰角礫岩, 凝灰岩	
			岩戸山凝灰角礫岩		T b 2	円礫混り凝灰角礫岩	
			菖蒲田安山岩		An h	角閃石安山岩(岩脈)	
			早崎・上原玄武岩		B a	玄武岩	
			岩滓, 層灰岩		S c	岩滓, 層灰岩	
	古第三紀	始新世	口之津 層群	北有馬層	K a	砂岩, 泥岩	固 結 堆積物
大屋層				O y	礫岩, 砂岩, 泥岩		
			坂瀬川層	S a	頁岩・砂岩互層		

(長崎大学教育学部 鎌田 泰彦)

Ⅲ . 土 壤 図

1. 山地の土壤

1-1 概 要

島原半島の南端にあたり、地理的条件に恵まれて、古くより人為の影響を受けてきた。農地としてよく拓け、林業上からはあまり重視されていない。基磐となっている三紀砂岩層に伴って黄褐色森林土壤、これを貫く玄武岩上に暗赤色土壤、安山岩質の母材には褐色森林土壤の乾・湿タイプという類形が非常にはっきりしている。

1-2 細 説

1-2-1 岩石地

海岸の急崖にごく小面積分布する。

1-2-2 砂丘未熟土壤

海水浴場の砂浜がこれに相当する。

1-2-3 乾性褐色森林土壤

南串山町を中心として巾広い尾根・山腹に分布する。アカマツを上木とする常緑広葉樹が一般的な林相だが、ヒノキの植栽も浸透している。生産力は高くないが、一応は成林可能といった状態の林地が多い。

1-2-4 乾性褐色森林土壤（黄褐色）

図幅全域にひろく分布する。林況はマツ常緑広葉樹の背の低い混済林が多い。生産力は低い。

1-2-5 褐色森林土壤

1-2-3項土壤に付随する。ヒノキ・スギ植栽に利用されており、生産力も高い。

1-2-6 褐色森林土壤（黄褐色）

全域にわたって沢沿いにみられる。おおむね傾斜がゆるやかで造林地としてよく利用されており、生産力は高い部類にはいる。

1-2-7 暗赤色土壤

玄武岩を母材とし、下層土の色調が5 Y Rより赤いものをまとめた。風の影響が強く、生産力は高いとはいえない。

1-3 利 用

林地の面積が小さく林業経営上見るべきものはない。むしろ森林の持つ二次的効用に多くを期待されているといえよう。即ち、あまり豊富とはいえない農業用水源として大少数の溜池が準備されているが、これの水源涵養、広い風あたりの強い農地を守る、耕地防風、急傾斜地からの土砂流出防止といった機能が地域に寄与している。岩戸山の暖地性樹叢は遺された数少ない自然として知られるが、タチバナ、モクダチバナ、ショウベンノキ等の貴重な樹種を産する他、景観にすぐれ、風致林ともなっている。こういった森林の利用法は永年にわたる先人の知恵であり、今後の開発にあたっても充分考慮されねばならない。

(長崎県総合農林試験場 松尾俊彦)

2. 丘陵台地低地の土壌

2-1 土壌の概要

本図幅は島原半島の南部を占め、北東部は雲仙山麓の裾野であるが、中部および西部は堀川を境として西部は彦山(380m)東部は鳳上岳(410m)、愛宕山(291m)があり、河川は有馬川、堀川以外にはみるべきものはない。

地質は第三紀口ノ津層を基盤とし、その上部は安山岩、玄武岩により覆われている。丘陵台地の土壌は黄色土壌が多く、普通畑および水田として利用されている。赤色土壌は中南部に多く分布し、畑地として利用されている。暗赤色土壌は南有馬町白木野に分布し、水田として利用されている。

低地土壌は堀川、有馬川、有家川の流域に主に分布し、水田として利用されている。

本地域は長崎県の特産である馬鈴しょの主産地であり、無霜地帯が多いために冬馬鈴しょの栽培が多い。

2-2 土壌の細説

2-2-1 淡色黒ボク土壌

表層は腐植含量が5%以下の火山灰土壌である。彦山南部丘陵地に分布し、55cm内外に礫層が出現するところもある。

2-2-2 赤色土壌

下層土の土色が5 Y R 4 / 4より赤い土壤である。玄武岩の風化物を母材とする土壤で表土の土性はL i C, 下層土はL i C ~ H Cである。普通畑および樹園地として利用されており, 馬鈴しょ, ミカン, 野菜, 飼料作物等が栽培されている。

2-2-3 黄色土壤

下層土が5 Y Rより黄色味の強い土壤である。表土の土性はC L ~ L i C, 下層土はC L ~ H Cである。安山岩, 玄武岩の風化物を母材とする土壤で山麓, 丘陵台地上に分布し, 普通畑および樹園地として利用されている。普通畑の大部分は馬鈴しょが栽培され, 一部ミカンが栽培されている。

2-2-4 黄色土壤(湿性)

黄色土壤で鉄, マンガンの斑紋結核を有する土壤である。玄武岩, 安山岩の風化物を母材とする土壤で, 表土の土性はC L ~ L i C, 下層土はC L ~ H Cである。丘陵斜面に分布し, 水田として利用されている。

2-2-5 暗赤色土壤(湿性)

赤色土壤に類似しているが, 明度採度ともに低く, 下層土の土色は5 Y R 4 / 4又はそれ以下である。玄武岩の風化物を母材とする土壤で鉄, マンガンの斑紋結核を有し, 表土の土性はC L ~ L i C, 下層土の土性はL i C ~ H Cである。南有馬町に分布し, 水田として利用されている。

2-2-6 細粒灰色低地土壤

下層土の土色が灰色~灰褐色を呈する土壤で, 鉄, マンガンの斑紋結核を含む。表土の土性はC L ~ L i C, 下層土はL i C ~ H Cである。堀川, 有馬川流域に主に分布し, 水田として利用されている。

2-2-7 灰色低地土壤

下層土の土色が灰色~灰褐色を呈する土壤で, 鉄, マンガンの斑紋結核を含み, 表土の土性はC L, 下層土はS L ~ Lである。

北有馬町, 西有家町に分布し, 水田として利用されている。

2-2-8 粗粒灰色低地土壤

下層土の土色が灰色~灰褐色を呈する土壤で鉄, マンガンの斑紋結核を含み, 表土の土性はS L ~ C L, 下層土はS ~ C Lである。

地表下60cm以内に礫層~砂礫層を有し, 大部分は水田として利用されているが, 一部は畑地として利用されているところもある。

堀川の下流は細粒灰色低地土壌としたが礫層の出現位置によっては粗粒灰色低地土壌のところも含まれている。

2-2-9 細粒グライ土壌

作土直下よりグライ層を有する土壌である。作土の土性はL i C, 下層土の平均土性はCL~L i Cである。

水田として利用されている。

2-2-10 グライ土壌

地表下80cm以内にグライ層を有する土壌である。作土の土性はL~CL, 下層土はLで水田として利用されている。

2-2-11 粗粒グライ土壌

作土直下よりグライ層を有する土壌である。

作土の土性はCL, 下層土はLで作土直下より礫層となっている。

海成沖積で有家町にわずかに分布する。

(長崎県総合農林試験場 小野末太)

IV . 傾 斜 区 分 図

彦山中・小起伏火山地(Ⅰa-1, Ⅰa-2)では, S4, S3の傾斜を示し, その周辺の京泊・栄原高位溶岩台地では, 柳谷や溜水南方付近および路木から栄原にかけての一带, 北ヶ峰北方の標高240mから300mにかけての一带に平坦面S1が示され, その周辺に拡がるS2と共に広い平坦地を形成している。さらにその周りには, S3~S5の漸移面があって西岸の中位・低位の台地面(Ⅰa-4, Ⅲa-1, Ⅲa-2, Ⅲa-3, Ⅲa-4)に移行し, 中位・低位面はS1~S2の平坦地となり, S7の段丘崖に終わっている。(Ⅰa-3)南縁山麓地(Ⅰa')は, 平坦地から急にS5の急斜面に移りS4~S3と次第に傾斜を減じ, S2~S1を示す河岸段丘面(Ⅲb-1, Ⅲb-2)に移行している。小松川・堀川の西岸低地(Ⅳa)はS1で, その先端にある岩戸山・女島(Ⅱb・Ⅱc)は, S7の海食崖を有する急崖に囲まれた丘陵地である。

鳳上岳山地(Ⅰb)の山頂部はS2の平坦面をなし, 上原は標高350m内外の平坦地で, 周縁にS7の急崖を有し, 急崖下にはS1~S2の平坦地が分布する。山麓地(Ⅰb')のうち, 北部(Ⅰb'-1)は北向きのS7を示す弧状の急崖2列を有するS4面である。東北部(Ⅰb'-2)はS2が広範囲でその中にS1が散在する緩傾斜面である。東南部(Ⅰb'-2)は, 上部でS4, 中腹でS3が弧状に帯をなし, その間にS2を介在している。南部(Ⅰb'-3)には, S4, S3が山稜に平行して交互に分布し, 西南部(Ⅰb'-4)ではS4, S3が円弧状をなしてS2面を抱いている。西部(Ⅰb'-5)では上部にS4, 下部にS3があり, その境界は3つの円弧を描いている。愛宕山山地(Ⅰc)では, 山頂部に平坦面S2, 周辺にS7の急崖があり, その周縁(Ⅰc')はS5, S4, S3の順に低夷し, S2を示す段丘面(Ⅲb-3, Ⅲb-4, Ⅲc-1, Ⅲc-2)に移行し, S7を示す段丘崖に終わっている。さらにS1を示す唐人町(Ⅰb-1)と白浜低地(Ⅰb-2)との間には直線状の急崖S7が指摘される。早崎丘陵地(Ⅱd)は, S4~S2面から構成され, 北側に断層起原の急崖S7を有し, 周りの海岸段丘(Ⅲd-1, Ⅲd-2)及び早崎低地(Ⅳb-3)はS1面で, 末端は段丘崖S7に終わっている。

本図の東北部には論所原小起伏火山地(Ⅰd)の末端部がみられ, S3~S5の傾斜地をなし, 北有馬山麓地(Ⅰd'-1)では, S3面が主でS4を交える。そのうち竜石川・大手川間の山麓地では例外的に稜線部分にS1~S2の平坦面が残存している。西有家

山麓地（I d' - 2）は、I d' - 1 に較べて緩傾斜となりS 1～S 3面で構成されている。東岸におけるS 1面は、石田海岸段丘（III h）・有家扇状地（IV c - 1）・西有家海岸段丘（III g）・有馬川低地面および段丘面（IV c - 3・III f）・大江低地面（IV c - 4）・下湾・向小屋低地（IV c - 5）のほか原城趾・法花寺段丘（III e - 1・III e - 2）の一部が挙げられる。

（長崎大学教育学部 石井泰義）

V. 水系・谷密度図

本図幅の主な水系は、千々石湾に流入する西岸河川と島原湾に流入する東岸河川の2つに大別される。

西岸河川には、彦山火山地（I a）を流下する小津波見川・津波見川・小松川と彦山火山地（I a）と鳳上岳山地（I b）および愛宕山山地（I c）との境界部を流れる堀川とがある。

津波見川・小松川は高位溶岩台地面（I a - 3）上を緩流し、前者は標高100mと60mの両地点に、後者は標高200mと140mの両地点に遷移点を有し、両地点間が急流帯をなし、下位の遷移点より下流部が2級河川に指定されている。また、後者は河口部で野田浜砂丘を切る。堀川本川は（I a）と（I b）の両山地の境界部、支流山口川・中尾川はI bと（I c）の境界部の地すべり末端部を刻み両岸に段丘地形を形成し、上流には湧水利用の溜池が多い。最下流は砂丘の後背低湿地帯をなしたが旧藩時代に干拓され、河川は人工的に延長されている。本支流共に遷移点より下流部が2級河川に指定されている。

東岸河川では、中央部に有馬川があり、上・中流部では篳入蛇行し、両岸には河岸段丘が発達している。右岸の支流・セツ川・惠通谷川・ドンドン川は右岸の左岸の支流に較べて急勾配で本川との不調和合流もみられる。右岸の支流・坂下川・西正寺川・高江川・大手川は論所原小起伏火山地（I d）を刻む河谷である。本川・支流共に2級河川に指定され、下流部にデルタを形成、前面に干拓地がある。東北部の蒲河川・有家川・須川は有家

扇状地(Ⅳc-1)を形成、いずれも2級河川。東南部の葉山川・田町川・六反田川・中谷川は鳳上岳・上原(Ⅰb)に源を発し、緩傾斜の山麓地では湧水利用の溜池を伴う小河川で、河口部では砂丘を切っている。いずれも下流部は2級河川に指定されている。

本図における谷密度は、彦山火山地(Ⅰa)と鳳上岳火山地(Ⅰb)の境界部を刻む堀川本川の上流部、や彦山火山地(Ⅰa)と論所原小起伏火山地(Ⅰd)との境界部を刻む有馬川上流部ならびに西有家山麓地(Ⅰd'-2)を刻む大手川・竜石川流域で谷密度が最も高く30~40の数値を示す。鳳上岳・上原の山麓地(Ⅰb')の中で(Ⅰb'-5)のみは、上述の堀川本川上流域に当り最高値を示すが、(Ⅰb'-1)、(Ⅰb'-4)の山麓地では20~30の数値を示し、(Ⅰb'-2)、(Ⅰb'-3)の山麓地では10~20の低い数値を示している。他に10~20の数値を示す地域は、(Ⅰa-3)のうち柳谷付近、(Ⅰa-4)のうち辺木付近が指摘されるほか、堀川流域段丘(Ⅲb)のうち山口・道原付近や東岸では(Ⅲe-2)、(Ⅲg)の地域が挙げられる。谷密度10以下の地域は、西岸低地(Ⅳa)・南岸低地(Ⅳb)・東岸低地(Ⅳc)の低地部のほか、岩戸山、女島・早崎丘陵地(Ⅱb、Ⅱc、Ⅱd)や西岸角地(Ⅲa)の竹比・串付近および石田段丘(Ⅲh)付近に指摘される。

(長崎大学教育学部 石井泰義)

Ⅵ . 防 災 図

(1) 地すべり防止区域

地 域 名		所 在 地		地域面 積 (ha)	家屋数 (戸)	告 示 年月日	地すべり地の概況 発 生 年 月 日	所管
区域名	関 係 河川名	市 郡	町 村					
六 田	小松川	南高木郡	加津佐町	1600	5	S 37. 12. 22	S 28. S 33	農 林
北ヶ峯		〃	〃	6915	137	S 44. 3. 31	S 38	〃
花 房		〃	〃	2364	51	〃	S 32 , 40	〃
上登龍		〃	〃	15778	337	〃	S 31 , 32 , 33	〃
田 町		〃	南有馬町	1070	} 10	S 37. 2. 14	} S 28, 37, 43, 44	〃
〃(追加)		〃	〃	2530		S 46. 3. 27		〃
夏 吉		〃	〃	1220	} 8	S 37. 2. 14	} S 35, 37, 39, 40	〃
〃(追加)		〃	〃	1860		S 46. 3. 27		〃
堤の上		〃	〃	970	8	S 37. 2. 14	S 28	〃
大 峯		有馬川	〃	〃	1390	9	〃	S 32
座 木	〃	〃	〃	830	} 7	〃	S 23 , 32 , 39 ,	〃
〃(追加)	〃	〃	〃	10380		S 44. 3. 31	40 , 41	〃
上 揚	〃	〃	〃	810	11	S 37. 2. 14	S 28	〃
矢 竹	六段田川 露田川	〃	〃	34300	542	S 50. 3. 31	S 35, 47, 48, 50	〃
西端迫	〃	〃	口之津町	1650	2	S 38. 8. 30	S 32	〃
奥 山	〃	〃	加津佐町	2811		S 37. 11. 19	T 12	林 野
大 抜	〃	〃	南有家町	12900	91	〃	T 12	〃
鏡 山	〃	〃	口之津町	1444	14	〃	T 12	〃
富士山	〃	〃	南有馬町	2360	19	S 44. 5. 12	S 32	〃
新 切	〃	〃	口之津町 加津佐町	6160	16	S 47. 12. 5	S 32	〃
三軒家	〃	〃	口之津町	5699	28	〃	S 32	〃
ハ〓久保	〃	〃	南有馬町	4240	12	S 50. 1. 21	S 46	〃
横 平	〃	〃	口之津町	4490		S 51. 4. 21		〃
口之津	〃	〃	〃	1866	400	S 35. 8. 25	S 28 , 31	建 設

資料：県河川砂防課，耕地課，林務課調

(2) 砂防指定地

河 川 名		所 在 地	指 定	関 係	着工年度	竣工年度
幹川名	溪流名		告示年月日	面積(ha)		
堀 川	堀 川	南高来郡加津佐町	S 32. 9. 6	3.00	32	33
山口川	山口川	〃	S 43. 2. 16	4.26	43	43
津波見川	津波見川	〃	S 44. 3. 13	3.10	44	45
川内川	川内川	〃 南串山町	S 47. 2. 14	3.30	45	46
堀 川	中尾川	〃 加津佐町	S 47. 3. 29	2.07	46	47
有馬川	高江川	〃 北有馬町	S 47. 3. 29	4.05	47	48
〃	釘山川	〃	S 47. 3. 29	3.25		
〃	浦口川	〃	S 47. 3. 29	1.35		
小松川	花房川	〃 加津佐町	S 47. 3. 29	2.70	47	49
六反田川	六反田川	〃 南有馬町	S 48. 5. 22	3.08	48	50
小松川	木場川	〃 加津佐町	S 48. 5. 22	1.68	48	
堀 川	登竜川及 び支川	〃	S 52. 4. 22	3.50		

資料：県河川砂防課調

(3) 急傾斜地崩壊危険区域

指定区域名	所 在 地	告示年月日	面 積 (ha)	人家 (戸)
① 栄 町	南高来郡口之津町	S 45. 9. 22	0.078	5

Ⅶ．土地利用現況図

島原半島の形成は新生代第三紀末、海底火山の活動で南部地域が形成され、その後南部の噴火がすむと火山活動は北部に移り大噴火が起り雲仙岳が形成され北部、中部地域となったため地形、地質的に北部、中部域とまったく異り土地利用の形態も異っている。

地形的に見ると南串山台地、南有馬台地と図幅東北部の有家低地に大別される。台地と言っても標高400m以下の小起伏台地で、小さな沖積平野、扇状地性低地が入り乱れている。このため耕地率は県平均18%に比して36%と高く台地の上まで畑が切り開かれあわせて溜池も多く台地上に散在している。このように田、畑が台地の上まで開かれているため現存している山林は畑地としての不適地が残った形となり散在している。樹種も二次林的シイ、アラカシ、萌芽林がほとんどである。

主要作物を見ると、みかん、ばれいしょ、酪農および福原オレンジの県の主産地として加津佐町が力を入れている。

(長崎県土地対策室 橋口敏雄)

1977年3月 印刷発行

南部地域総合開発地域
土地分類基本調査

口之津・三角

編集発行 長崎県土地対策室

長崎市江戸町2-13

印刷 株式会社富士マイクロサービスセンター

熊本市水前寺6丁目46-1